

## 教師と学習者の外国語学習のビリーフの比較 —類似と相違が示唆すること—

稲葉 みどり

日本語教育講座

### Implications from the Study of Students' and Teachers' Beliefs about Foreign Language Learning

Midori INABA

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

#### 要約

本稿では、小中学校の教師が持つ外国語学習のビリーフの特徴を日本人の大学生と比較しながら考察した。調査内容は、Horwitz (1985, 1987, 1988) が開発したBALLIの中の「外国語学習の難しさ (7項目)」「学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー (8項目)」の2つのカテゴリーの15項目である。分析の結果、小学校教師も中学校教師もほとんどの項目で概ね類似した傾向を示した。また、大学生ともよく似た傾向が見られた。稲葉 (2015) の「外国語学習の適性」、「外国語学習の特質」、「動機と期待」に対する20項目の結果と合わせると、BALLIのほとんどの項目でこれらの3グループ間において同じような傾向が見られることが明らかになった。そこで、この傾向が、日本人が英語を学習する場合のみの特徴かどうかのものかどうかを確かめるために、高崎 (2014) のメキシコにおける日本語学習者の調査結果と比較したところ、文化的、社会的背景が異なるにも関わらず、多くの項目で類似した傾向が見られた。しかし、本研究は愛知県内の限られた教師、学生を対象としたものであり、本稿で取り扱ったのは、BALLIの一部の項目だけである。よって、学習者の特性を知るためには、BALLI以外にも様々な角度からの調査が必要であり、学習者の学習スタイル、学習ストラテジー、レディネス、適性等に関して学習者からできるだけ多くの情報を得るための方法の開発や設問の精緻化が今後の課題となった。

Keywords : ビリーフ、英語教育、外国語学習、小中学校教師、BALLI

#### 1. はじめに

外国語の学習や教育を考える場合、学習者がどのような学習意識、学習スタイル、学習ストラテジー等を持っているかを知った上で、教師は教授法、教室活動を考えることは重要である。一方で、教師が外国語学習や教育についてどのような考え方を持っているかを知ることでもある。外国語学習について教師が持つ考え方は、教室活動を選択したり、決定する場合の拠り所となるからである。

Pajares (1992)、Brog (2001) は、言語プログラムやカリキュラムを作成する際に、教師の考え方は、授業計画、目標設定、評価や効果の測定等に影響を及ぼすと主張している。これらの言語学習の方法・効果等

について人々が自覚的あるいは無自覚的に持っている信念や確信をここではビリーフと呼ぶ。

授業づくりにおいては、教師は学習者が持つビリーフと教師が持つビリーフの両方に配慮することが大切である。Peacock (1998a, 1998b) は、教師と生徒の間にビリーフの違いがあると、生徒の学習意欲が損なわれたり、生徒が落胆したり、自信をなくしたりすることがあると主張している。

そこで、本研究では、外国語教育に関わる小学校教師・中学校教師がどのような学習観や教授観、ビリーフ等を持っているかをアンケート調査により明らかにする。調査内容は、Horwitz (1985, 1987, 1988) が開発したBALLIを含む125項目である。稲葉 (2015) では、BALLIの5つのカテゴリーの中の「外国語学習の

適性]、「外国学習の特質」、「動機と期待」に対する20項目の回答を分析したので、ここでは、「外国語学習の難しさ(7項目)」「学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー(8項目)」の2つのカテゴリーの15項目について考察する。そして、これらの項目について、稲葉(2014)の大学生を対象とした調査の結果と比較する。

## 2. 先行研究

### 2.1 日本人の英語学習に関するビリーフ研究

筆者はこれまで外国語教育における教える側と学ぶ側のビリーフがどのように異なるかに着目して、研究を進めてきた。稲葉(2013)では、英語学習に関する意識を中学1~3年生、及び、小中学校教師にアンケート調査し、小中学校教師の意識、中学生と教師の意識の類似点と相違点を比較して明らかにした。

また、稲葉(2014)では、大学生の外国語学習観についてBALLIを用いて調査し、「外国語を学習するのは大人よりも子どもの方が容易である」「外国語として学習するのが簡単な言語と難しい言語がある」「外国語を話すためにはその国の文化を知る必要がある」「何度も繰り返したり、練習したりすることは重要である」等について肯定的な考えを持っていることを提示した。そして、これらの結果が、Horwitz(1987)の米国におけるESL学習者に対する調査、及び、Horwitz(1988)のドイツ語、フランス語、スペイン語の学習者の調査と概ね類似した傾向であることを報告した。

稲葉(2015)では、小学校、中学校教師のビリーフを調査した。BALLIの5つのカテゴリーの中の「外国語学習の適性」、「外国学習の特質」、「動機と期待」に対する20項目の回答を分析し、これらの両グループで類似した分布の傾向が見られることを明らかにした。さらにこれらの結果を稲葉(2014)の大学1年生を対象とした調査と比較すると、こちらとも類似の傾向が見られることが明らかになった。そして、経歴の異なる集団でよく似た傾向が見られたことから、ビリーフは教育歴等にあまり左右されないということ、一旦形成されたビリーフは簡単には変わらない可能性を提示し、Pajaras(1992:326)や岡崎(2001)の主張を支持する結果を得た。

稲葉(2013, 2014, 2015)の研究は、日本に住み、日本の学校で教育を受けた学習者、教師の場合は日本人に教えている人を対象とし、英語学習を念頭においた調査結果に基づいたものである。文化的、社会的、教育的に背景が大きく異なる海外での外国語学習者と比べると、全て類似した環境で外国語教育に関わっている集団と言える。

### 2.2 日本語学習者を対象とした海外のビリーフ研究

海外におけるビリーフに関する研究は、坂井(2000)、岩井・岩澤(2004)、片桐(2005)、和田(2007)、小原・栗原(2008)をはじめ数多くあるが、本節では、日本語教育、日本語学習の立場からのビリーフの研究を見てみることにする。日本語を外国語として学ぶ場合に着目するのは、筆者の研究が日本で行われていること、被験者の大学生が日本語教授法の受講者であること、筆者が日本語についての知識を持っていること、日本語教育や日本語教師の立場からからの知見が得られること等が主な理由である。

高崎(2014)は、メキシコにおける日本語学習者の日本語・日本語学習についてのビリーフや考えを調査したものである。その中で、高崎はビリーフ研究の意義や有用性に触れている。まず、現地に赴任する日本語専門家が限られた任期の中で学習者の特性を把握するのに役立つことである。学習者の特性を知った上で教えることは、海外で多様な学習環境、学習特性を持つ人々に日本語(外国語)を教えるには学習効果を上げる不可欠である。高崎(2014)は、岩井・岩澤(2004)のハンガリーにおけるビリーフ研究について言及し、語彙力重視の外国語教育が日本語学習のビリーフにも影響を与える例や、自身の研究(高崎, 2006)からフィリピンでは英語学習で身につけたビリーフが日本語学習には作用しないで挫折する学習者がいる例を紹介し、日本語教師がこれらの知識や情報を事前に持つことの有効性を説いている。

高崎(2014)は、2011年にメキシコで9機関の初級日本語クラスに所属する学習者243名にビリーフ調査を実施した。調査は、BALLI(Horwitz 1987)を含む51問を含む日本語学習に関する内容である。高崎(2014:33)では、同じような歴史的背景を持つスペインとフィリピンの結果とメキシコでの調査結果を比較し、メキシコにおける日本語学習者の特性として、「メキシコ人学習者は日本文化に強い関心を持ち、日本人と友人になって日本語で会話したいとの期待を持っていること」「日本語で話すこと、聞くことを好み、参加型の教室活動を指向する傾向が認められこと」を挙げ、その一方で、「初期の間違いを訂正されないと後で直しにくい」と考える傾向は、スペイン、フィリピンの日本語学習者よりも強く、「語彙は重要」としながらも「上達させたい希望」「知らない単語を辞書で調べるべきだと考える度合いは低く、学習については楽観的な側面も窺えること」「外国語習得に必要とみなしている時間は他の2つの国よりも長かった」等を報告している。これらの結果について高崎は、江原(1998)の研究に言及し、「メキシコ人学習者は、外交型、操作型の感覚・認知の特性を持ち、相互作用のある学習や作業から何かを学んだりするのを好む」傾向や「メキシコ人学習者は聴覚型が強いため、視覚要素の強い授業で

は苦痛を感じたり、退屈してしまう可能性もある」という予測を支持するものである述べている。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 調査の内容と方法

ピリーに関する調査は、Horwitz (1985, 1987, 1988) が開発したBALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) の34項目の設問に1項目を追加したもので、一般の外国語学習、及び、英語学習を念頭においた内容で作成した。調査にはこの他、英語や外国語の学習観、教授観、信念に関する質問も含み、設問数は、総計125である。本稿ではこの中のピリーに関する34項目のうちの15項目を分析対象とする。

回答の方法はBALLIと同様の5段階（「1. 強く賛成する」「2. 賛成する」「3. 賛成も反対もしない」「4. 反対する」「5. 強く反対する」）のリッカートスケールである。ただし、項目35だけは質問の内容から、「1. 1年以内」「2. 1～2年」「3. 3～5年」「4. 5～10年」「5. 1日に1時間だけではことば（外国語）は身につかない」とした。

結果は、有効回答中の回答数の割合、平均値(1～5)を算出した。さらに、選択肢「1. 強く賛成する」「2. 賛成する」の2つを合計した割合を肯定率、「4. 反対する」「5. 強く反対する」の2つを合計した割合を否定率として提示した。このような5段階のスケールでは、1と2、4と5の客観的な判断基準は明確でないので、本稿では、賛否の傾向を見るために、肯定率、否定率を併用することにした。

#### 3.2 被験者

本調査に協力してもらったのは、愛知県内の公立の小学校と中学校の現職教員である。小学校教員22人、中学校教員21人、合計43人である。小学校教員の教職歴は最小1年、最大35年で、平均13.8年である。中学校教員の教職歴は最小0.6年、最大38年で、平均14.7年である。中学校教員の担当教科は1人（養護）を除き、英語である。年齢構成等の内訳は稲葉（2015）で示した。

大学生は愛知教育大学で「日本語教育学入門」の授業を受講している1～4年生である。全部で149名から回答を得たが、ここではその中の1年生114人の結果を分析の対象とする。大学生の専攻等内訳は稲葉（2014）で示した。

#### 3.3 研究課題

Horwitz (1985, 1987) はBALLIの34項目の設問を「外国語学習の適性（9項目）」「外国語学習の難しさ（7項目）」「外国語学習の特質（6項目）」「学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー（8項目）」

「動機と期待（5項目）」の5つのカテゴリーに下位分類している。「外国語学習の適性（9項目）」「外国語学習の特質（6項目）」「動機と期待（5項目）」については、稲葉（2015）で取り扱ったので、ここでは、「外国語学習の難しさ（7項目）」「学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー（8項目）」の2つのカテゴリーの15項目について考察する。そして、稲葉（2014）の大学生を対象とした調査と比較するために、結果表の「大学生」欄に該当項目の数値を入れた。また、高崎（2014）のメキシコでの調査の中から、稿の内容と共通する13項目についても平均値を表中の〔 〕に記載した。

### 4. 結果と考察1：外国語学習の難しさ

#### 4.1 外国語学習の難しさ

まず、外国語学習の難しさに対するして、小中学校教師と大学生がどのように考えているかを考察する。BALLIの外国語学習の難しさに関する7項目のうち、個別言語に関わる設問3、4、5、6（「個別言語の難しさ」「日本語の難しさ」「英語の難しさ」「自分にとって英語の難しさ」）の結果をみる。

【表1】は、外国語学習の難しさに関する設問の一覧である。【表2】は設問に対する小学校教師（小学校）、中学校教師（中学校）の5段階の回答の割合、平均値（1～5の区間）、及び、肯定率、否定率の割合の合計を示している。各設問は表1の番号に対応している。以下、同様の方法でデータを表示する。

まず、項目3（「外国語として学習するのが簡単な言語と難しい言語がある」）について、小学校教師は、平均値2.1、肯定率73%、否定率9%で、肯定率が圧倒的に上回っている。中学校教師は、平均値1.9、肯定率81%、否定率5%で、ここでも肯定率の方が非常に高く、両グループは類似の分布を示している。以上から、これらの小学校教師、中学校教師共に学びやすい言語と学びにくい言語があると考えていると言える。大学生についても、平均値1.8、肯定率84%、否定率4%で、同様の傾向が見られる。

項目4（「日本語は学ぶのが大変難しい言語である」）に対して、小学校教師は、平均値2.2、肯定率73%、否

【表1】外国語学習の難しさに関する設問

番号	設 問
3	外国語として学習するのが簡単な言語と難しい言語がある。
4	日本語は学ぶのが大変難しい言語である。
5	英語は学ぶのが大変難しい言語である。
6	自分は英語が大変うまく話せるようになると信じている。

【表2】外国語学習の難しさに関する回答の分布 (%)

	1	2	3	4	5	平均	肯定	否定
設問3						[ - ]		
小学校	23	50	18	9	0	2.1	73	9
中学校	38	43	14	5	0	1.9	81	5
大学生	37	47	12	1	3	1.8	84	4
設問4						[2.37]		
小学校	18	55	14	14	0	2.2	73	14
中学校	24	38	33	5	0	2.2	62	5
大学生	18	40	28	11	3	2.4	59	14
設問5						[ - ]		
小学校	5	23	36	36	0	3.0	27	36
中学校	5	10	48	33	5	3.2	14	38
大学生	7	17	42	30	4	3.1	24	35
設問6						[2.29]		
小学校	5	23	36	36	0	3.0	27	36
中学校	5	29	62	5	0	2.7	33	5
大学生	7	23	41	24	5	3.0	30	29

[ - ] 内は高崎 (2014) の該当項目の数値 [ - ] は該当項目無

定率14%で、肯定率が圧倒的に上回っている。中学校教師は、平均値2.2、肯定率62%、否定率5%で、小学校教師と類似の分布を示している。以上から、小学校教師、中学校教師共に日本語は学ぶのが大変難しい言語であると考えていることが分かる。大学生は、平均値2.4、肯定率59%、否定率14%で、やはり過半数が学ぶのが難しいと回答している。

項目5(「英語は学ぶのが大変難しい言語である」)について見ると、小学校教師は、平均値3.0、肯定率27%、否定率36%で、否定率の方が多少上回っている。中学校教師については、平均値3.2、肯定率14%、否定率38%で、よく似た分布を示している。大学生も、平均値3.1、肯定率24%、否定率35%で、否定率の方が少し高く、英語が学ぶのが特段難しいとは考えていないようである。

項目6(「自分は英語が大変うまく話せるようになると信じている」)に関しては、小学校教師は、平均値3.0、肯定率27%で、否定率36%で、両側に分かれている。中学校教師については、平均値2.7、肯定率33%、否定率5%で、否定率は低い。よって、小学校教師の方が英語の上達に自信のない人の割合が高いのではないと思われる。大学生の分布は、平均値3.0、肯定率30%、否定率29%で、両極に分かれ、小学校教師と似た傾向である。いづれにしても、全グループの平均値から見ると、やや否定的な傾向の方が強い。

## 4.2 外国語の技能と難しさ

ここでは、外国語の技能と難しさに関わる設問25、34(「話す聞くことの難しさ」「読み書きの難しさ」)の結果を見る。【表3】は、外国語の技能と難しさに関する

【表3】外国語の技能に関する設問

番号	設 問
25	外国語は聞いて理解するより話す方が簡単である。
34	外国語を話したり聞いて理解するより、読んだり書いたりする方が簡単である。

【表4】外国語学習の技能に関する回答の分布 (%)

	1	2	3	4	5	平均	肯定	否定
設問25						[3.13]		
小学校	3.0	27	36	3.0	27	3.0	38	38
中学校	2.7	33	5	2.7	33	3.9	5	71
大学生	8	15	39	28	10	3.2	23	38
設問34						[2.70]		
小学校	0	27	36	36	0	3.1	27	36
中学校	0	19	48	29	5	3.2	19	33
大学生	15	26	38	13	8	2.7	41	21

[ - ] 内は高崎 (2014) の該当項目の数値

る設問の一覧である。【表4】は、外国語の技能と難しさに関する設問に対する回答番号1～5の分布の割合、平均値、肯定率、否定率を示している。

まず、項目25(「外国語は聞いて理解するより話す方が簡単である」)について、小学校教師は、平均値3.0、肯定率38%、否定率38%で、両極に分かれている。中学校教師は、平均値3.9、肯定率5%、否定率71%で、否定率が非常に高い。したがって、聞くより話す方が簡単であるとは考えない傾向は、中学校教師の方に強く見られる。大学生は、平均値3.2、肯定率23%、否定率38%で、小学校教師と似た傾向である。

項目34(「外国語を話したり、聞いて理解するより、読んだり、書いたりするほうが簡単である」)に対して、小学校教師は、平均値3.1、肯定率27%、否定率36%で、両側に分かれている。中学校教師は、平均値3.2、肯定率19%、否定率33%で、どちらも否定率の方が高い。よって、どちらも話す・聞くより、読む・書くほうが難しいと考える傾向がある。大学生は、平均値2.7、肯定率41%で、読んだり書いたりすることのほうが話すことよりも簡単であると考えた傾向は教員よりも高い。

## 4.3 学習時間と進歩

ここでは、外国語の学習時間に関する捉え方を見る。項目35「もし、毎日1時間外国語の勉強をすると、その外国語を非常にうまく話せるようになるにはどのぐらいの期間がかかるだろうか」という設問に対する回答を見る。

【表5】は、外国語の学習時間に関わる設問35、【表6】は、設問35に対する回答番号1～5の分布の割合、平均値、回答番号1と2の合計の割合、4と5の合計の

【表5】外国語の学習時間に関する設問

番号	設 問
35	もし毎日1時間外国語の勉強をすると、その外国語を非常にうまく話せるようになるにはどのぐらいの期間がかかるだろうか。

【表6】外国語の学習時間に関する回答の分布 (%)

	1	2	3	4	5	平均	1/2	4/5
設問35						[2.90]		
小学校	9	27	23	18	23	3.2	36	41
中学校	0	11	26	47	16	3.7	11	63
大学生	4	15	39	29	13	3.3	18	42

[ ] 内は高崎（2014）の該当項目の数値

割合を示している。

まず、小学校教師は、一番多いのは、「2. 1～2年」で27%である。次に「3. 3～5年」「5. 1日に1時間だけではことば（外国語）は身につかない」の23%である。一番少ないのは、「1. 1年以内」の9%である。分布は全体にばらついているが、1年以内という短時間でうまく話せると考える人は少なく、一日に1時間だけではことば（外国語）は身につかないと考える人も多い。中学校教師は、一番多いのは、「4. 5～10年」で47%である。続いて、「3. 3～5年」の16%である。一番少ないのは、「1. 1年以内」の0%、次に少ないのが、「2. 3～5年」の11%である。この結果を見ると、3～10年程度の範囲と考える人が7割以上である。

大学生の場合は、一番多いのは、「3. 3～5年」の39%である。次に多いのが、「4. 5～10年」である。「5. 1日に1時間だけではことば（外国語）は身につかない」は13%である。一方、「1. 1年以内」「2. 1～2年」は合わせても18%で、5年以内にできるようになると考える人は少ない。よって、外国語学習には何年もの期間が必要であると考えられる傾向が見られる。

## 5. ストラテジーと誤用

### 5.1 学習ストラテジー

ここでは、外国語の学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジーに関する8項目のうち、「学習ストラテジー」に関わる設問14、18、26、「（単語を推測）」「繰り返し練習」「CD等から音声聞いて練習」の回答を見る。【表7】は、学習ストラテジーに関する設問の一覧である。【表8】は、学習ストラテジーに関する設問に対する回答番号1～5の分布の割合、平均値、肯定率、否定率を示している。

結果を見ると、項目14（「外国語の単語を知らない場合、推測するのはかまわない」）に対して、小学校教師は、平均値2.2、肯定率68%、否定率5%で、肯定率が

【表7】学習ストラテジーに関する設問

番号	設 問
14	外国語の単語を知らない場合、推測するのはかまわない。
18	何度も繰り返したり、練習したりすることは重要である。
26	CD等から、音声聞いて練習することは重要である。

【表8】学習ストラテジーに関する回答の分布 (%)

	1	2	3	4	5	平均	肯定	否定
設問14						[1.85]		
小学校	14	55	27	5	0	2.2	68	5
中学校	19	67	14	0	0	2.0	86	0
大学生	34	51	11	4	0	1.8	85	4
設問18						[1.52]		
小学校	18	64	14	5	0	2.0	82	5
中学校	29	71	0	0	0	1.7	100	0
大学生	62	30	6	2	0	1.5	92	2
設問26						[1.57]		
小学校	9	64	23	5	0	2.2	73	5
中学校	29	71	0	0	0	1.7	100	0
大学生	39	46	12	3	0	1.8	85	3

[ ] 内は高崎（2014）の該当項目の数値

圧倒的に上回っている。中学校教師は、平均値2.0、肯定率86%、否定率0%で、肯定率の方が圧倒的に高く、小学校教師と類似の分布を示している。以上から、これらの小中学校の教師共に分からない場合、推測することを認めていると考えられる。また、大学生についても、平均値1.8、肯定率85%、否定率4%で、教師群とよく似た傾向が見られる。

次に、項目26（「CD等から、音声聞いて練習することは重要である」）に対して、小学校教師は、平均値2.2、肯定率73%、否定率5%で、肯定率が圧倒的に上回っている。中学校教師は、平均値1.7、肯定率100%、否定率0%で、肯定率の方が非常に高く、この点は小学校教師と類似の分布を示している。以上から、これらの小中学校の教師共に外国語学習における音声の重要性を認識していると言える。大学生については、平均値1.5、肯定率92%、否定率2%で、よく似た傾向が見られる。よって、全てのグループで耳から学習することが重要性であると考えていることが分かる。

次に、項目18（「何度も繰り返したり、練習したりすることは重要である」）に対して、小学校教師は、平均値2.0、肯定率82%、否定率5%で、肯定率が圧倒的に上回っている。中学校教師は、平均値1.7、肯定率100%、否定率0%で、肯定率の方が非常に高く、この点は小学校教師と類似の分布を示している。以上から、これらの小中学校の教師共に外国語学習において繰り返し練

習することは重要と考えていることが分かる。また、大学生についても、平均値1.5、肯定率92%、否定率2%で、教師とよく似た傾向が見られる。

## 5.2 コミュニケーション・ストラテジー

ここでは、「コミュニケーション・ストラテジー」に関わる設問8、13、21（「良い発音」「母語話者と練習」「気おくれ (timid)」）の回答を見る。【表9】は、コミュニケーション・ストラテジーに関する設問の一覧である。【表10】は、コミュニケーション・学習ストラテジーに関する設問に対する回答番号1～5の分布の割合、平均値、肯定率、否定率を示している。

結果を見ると、項目8（「外国語をよい発音で話すことは大切である」）に対して、小学校教師は、平均値2.9、肯定率41%、否定率23%で、肯定率が上回っている。中学校教師は、平均値2.7、肯定率43%、否定率24%で、小学校教師と類似の分布を示している。以上から、これらの小中学校の教師共に発音は大切であると考えていることが分かる。また、大学生については、平均値2.2、肯定率69%、否定率11%で、肯定率は教師群の場合より高い。

次に、項目13（「その外国語を母語話者と話して外国語を練習するのが好きだ」）に対して、小学校教師は、平均値2.1、肯定率64%、否定率0%で、肯定率が圧倒的である。中学校教師は、平均値1.9、肯定率86%、否

【表9】 コミュニケーション・ストラテジーに関する設問

番号	設 問
8	外国語を良い発音で話すことは大切である。
13	その外国語を母語話者と話して外国語を練習するのが好きだ。
21	他の人と英語を話すとき、気おくれがする。

【表10】 コミュニケーション・ストラテジーに関する回答の分布（%）

	1	2	3	4	5	平均	肯定	否定
設問8						[1.85]		
小学校	5	36	36	14	9	2.9	41	23
中学校	14	29	33	19	5	2.7	43	24
大学生	27	42	19	10	2	2.2	69	11
設問13						[1.45]		
小学校	27	36	36	0	0	2.1	64	0
中学校	29	57	14	0	0	1.9	86	0
大学生	19	32	34	9	6	2.5	51	15
設問21						[2.60]		
小学校	10	29	52	10	0	2.6	38	10
中学校	5	24	48	19	5	3.0	29	24
大学生	14	31	37	14	4	2.6	45	19

[ ] 内は高崎（2014）の該当項目の数値

定率0%で、肯定率はさらに高い。以上から、これらの小中学校の教師共に母語話者と話して練習するのが好きだと考えていることが分かる。

一方、大学生については、平均値2.5、肯定率51%、否定率15%で、肯定率は教師群の場合より低い。以上から、いずれのグループも肯定率は50%以上で、ネイティブ・スピーカーと会話練習したいと考えていることが分かる。そして、それは、中学校教師が一番強く肯定し、次に小学校教師、そして、大学生の順である。次に、項目21（「他の人と英語を話すとき、気おくれがする」）に対して、小学校教師は、平均値2.6、肯定率38%、否定率10%で、気おくれする方が多い。中学校教師は、平均値3.0、肯定率29%、小学校教師より気おくれする人と感じる人は少ない。大学生の場合は、平均値2.6、肯定率45%、否定率19%で、英会話をするのにやや不安を抱いている人が約半分近くいる。

## 5.3 正しさ・誤り

ここでは、「コミュニケーション・ストラテジー」に関わる設問15、22（「正しさ」「誤り」）の回答を見る。【表11】は、誤用に関する設問の一覧である。【表12】は、誤用に関する設問に対する回答番号1～5の分布の割合、平均値、肯定率、否定率を示している。

項目15（「正しく言えるようになるまで外国語を言うべきではない」）に対して、小学校教師は、平均値4.4、肯定率5%、否定率82%で、否定率が圧倒的に上回っている。中学校教師は、平均値4.7、肯定率0%、否定率100%で、全員否定しており、どちらも類似した分布を示している。大学生についても、平均値4.4、肯定率5%、否定率84%で、よく似た傾向が見られる。よって、全

【表11】 誤りに関する設問

番号	設 問
15	正しく言えるようになるまで外国語を言うべきではない。
22	入門期の学習者が外国語の誤りをしてもよいとすると、後になって誤りを直すのが難しくなる。

【表12】 誤りに関する回答の分布（%）

	1	2	3	4	5	平均	肯定	否定
設問15						[4.09]		
小学校	0	5	14	23	59	4.4	5	82
中学校	0	0	0	29	71	4.7	0	100
大学生	1	4	11	25	50	4.4	5	84
設問22						[2.86]		
小学校	0	18	36	45	0	3.3	18	45
中学校	0	19	38	43	0	3.2	19	43
大学生	13	33	32	18	4	2.7	47	22

[ ] 内は高崎（2014）の該当項目の数値

でのグループで「正しく言えるようになるまで外国語を言うべきではない」とは考えない傾向が見られる。

最後に、項目22（「入門期の学習者が外国語の誤りをしてもよいとすると、後になって誤りを直すのが難しくなる」）に対する結果を見る。小学校教師は、平均値3.3、肯定率18%、否定率45%で、否定的な傾向を示している。中学校教師も、平均値3.2、肯定率19%、否定率43%で、小学校教師と類似の分布を示している。

一方、大学生については、平均値2.7、肯定率47%、否定率22%で、教師群よりも肯定する傾向は低い。

## 6. まとめ

以上、小学校教師、中学校教師を対象にBALLIの5つのカテゴリの中の「外国語学習の難しさ（7項目）」「学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー（8項目）」の2つのカテゴリの15項目に関して調査した結果を分析した。その結果、以下の傾向が明らかになった。

まず、「外国語学習の難しさ」に関しては、小学校教師、中学校教師共に外国語には学び易い言語とそうでない言語があると捉える傾向がある。この傾向は大学生においても見られた。また、日本語については、学ぶのが難しい言語であると捉える傾向が全てのグループで見られた。一方、英語については、全てのグループで学ぶのが大変難しい言語であると考えた人が少なく、学びにくい言語だとは感じていないことが分かった。しかし、英語が大変うまく話せるようになるかどうかに関しては、肯定的な人の割合は少なく、全体ではそう思わない傾向が見られた。特に小学校教師と大学生には、上達に自信のない人傾向が中学校教師よりも顕著であった。

次に「外国語の技能別に見た学習の難しさ」に関する意識を見ると、全グループで「聞いて理解するより話す方が簡単」とは思わない傾向が見られた。中学校教師ではこの傾向が強く見られ、話すことは難しいと感じていることが分かった。また、「話す・聞く」より「読み・書き」の方が難しいと考える傾向が見られ、この傾向は大学生より小中学校教員の方が顕著であった。

外国語習得に必要な時間は、概ね5～10年ぐらいの間で、3年以内と考える人は少なかった。よって、外国語の学習には、比較的長い期間が必要であると考えられる傾向が見られた。

次に「学習ストラテジー」に関する回答では、全グループにおいて「何度も繰り返したり、練習したりすることは重要である」と捉える傾向が見られた。「CD等から、音声聞いて練習すること」についても、全グループにおいて重要であると捉えられ、耳から学習することの大切さを認識していることが分かった。また、外国語が分からない時は推測することは構わない

と考える傾向も見られた。

「コミュニケーション・ストラテジー」に関しては、全グループにおいて「よい発音」で話すことは大切であると考えられる傾向が見られた。また、母語話者と話して練習することについては、いずれのグループも肯定的で、母語話者と会話練習したいと考えていることが分かった。この傾向は中学校教師に一番顕著であった。また、他の人と英語を話すとき、「気おくれがする」と感じる人の割合は、中学校教師ではそれほど高くなかったが、小学校教師と大学生においてはやや不安を抱えている人が約半分いることが分かった。

誤りに関しては、全てのグループで「正しく言えるようになるまで外国語を言うべきではない」には、否定的な傾向が見られた。また、小中学校教師は、「入門期の学習者が外国語の誤りをしてもよいとすると、後になって誤りを直すのが難しくなる」には強く否定する傾向が見られたが、大学生はあまりこのように考えない傾向が見られた。

以上から、本研究で被験者となった教員と大学生のグループでは、「外国語学習の難しさ（7項目）」「学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー（8項目）」においても、ほとんどの項目で非常に類似した傾向が見られた。稲葉（2015）の結果と合わせるとBALLIの大半の項目で類似していることが明らかになった。

## 7. ディスカッション

本研究の結果を高崎（2014）の結果と比較すると、「日本語学習の難しさ」については、やや難しい言語であると考えられる傾向が見られる（[2.37]）が、日本人の結果も数値が似ており、意識が近い。また、両者とも母語話者との練習を好む傾向（[1.49]）は共通している。外国語習得に要する時間については、日本人の平均値が（3.2～3.7）であるのに対して、メキシコ人は[2.90]で、日本人の方が長く時間がかかると考える傾向が見られた。

「話すよりも読み書きの方が簡単である」については否定率がフィリピン、スペインの日本語学習者と比べて一番高く（[2.70]）、読み書きを困難だと考える傾向があると述べている。日本人の場合も概して読み書きの方が難しいと考える傾向が見られた。

「CDでの練習の重要性」については、高崎の結果では肯定の割合は[1.57]と格段高い。これは、メキシコ人が好む耳から学ぶスタイルと共通することを指摘している。日本人の場合もこの項目を肯定する割合は非常に高かった。日本人が外国語を耳から学ぶスタイルかどうかはこの調査からは分からないが、いづれにしても外国語の学習には音声に触れて学ぶことの大切さを認識しているからであると考えられる。

高崎（2014：30）は、学習の過程で自らに課す規範という考え方から、メキシコ、スペイン、フィリピンの日本語学習者を比較している。スペインでは、自分が分からない単語は辞書で調べ、まだ正しく言えなくても話して、誤りがあればその場で訂正してもらう授業を指向する。フィリピンの場合は、初期の段階で必ずしも誤りを訂正しなくてもよいと見なす代わりに、正しく言えるようになるまで話すべきではないと考える度合いが相対的に高い。すなわち両国の学習者は自身の学習に何らかの規範を与えていると主張している。しかし、メキシコの場合は、分からない言葉を自分で調べる必要をあまり感じず、まだ正しく言えなくても話して積極的に参加する授業を指向している。つまり、自らに規範や規則を課すような学習の仕方については、他の2ヵ国ほど高く肯定していない傾向が見られるとしている。本調査の対象となった日本人の場合を見ると、「単語を知らない場合は推測するのはかまわない（項目14）」について高い肯定率を示している。高崎の調査文の日本語訳（原文はスペイン語）は「分からない辞書の単語は必ず辞書で調べるべきだ」となっており、本調査文とはやや異なるが、結果的には辞書を引かない方向になり、傾向は類似していることになる。

誤りに対する態度については、教師、大学生共に「正しく言えるようになるまで外国語を言うべきではない」とは考えず、誤りを犯すことを厭わずに話すことが非常に大切と考えている。しかし、「入門期の学習者が外国語の誤りをしてもよいとすると、後になって誤りを直すのが難しくなる」については、教師は否定的（3.3/3.2）で誤りを犯すことに寛容と解釈されるが、大学生の場合は教師よりは肯定する割合（2.7）が高く、高崎の被験者の数値（[2.86]）に近くなっている。2つの設問を合わせると、誤りは犯してもよいが、できるだけ正しく話す努力や誤りを正すことが大切であると考えていると解釈できる。

また、高崎（2014：25）では、府川・佐藤（2002）の中学生・高校生を対象としたビリーフ調査と取り上げ、生徒の意識として「上達に最も効果があるのは日本へ行くこと」「語彙、文法の学習重要」「良い発音が重要」「自分が外国語学習の適性がある」「3～5年で日本語が上手に話せるようになる」という回答が多く見られたことに言及し、これらは高崎（2014）の提示した結果と矛盾しないものであると述べている。

## 8. 結び

本稿では、小中学校の教師がどのようなビリーフを持つかを大学生と比較しながら明らかにした。結果は大半の項目で類似した傾向が見られた。先の稲葉（2015）の研究と合わせると、BALLIのほとんどの項

目で類似した傾向となることが明らかになった。よって、稲葉（2015）で提示したビリーフは教育歴等により左右されないこと、一旦形成されたビリーフは簡単には変わらない傾向があることに更なる証拠を追加し、Pajaras（1992：326）や岡崎（2001）の主張を支持する結果となった。

この傾向が、日本人だけのものかどうかを確かめるために、高崎（2014）のメキシコの日本語学習者の調査結果と比較したところ、文化的社会的背景が異なるにも関わらず、多くの項目で類似した傾向が見られた。本研究は、愛知県内限られた教師、学生を対象としたものであるため、さらに調査をする必要がある。

また、本稿で取り扱ったのは、BALLIの一部の項目だけである。学習者の特性を知るためには、BALLI以外にも様々な角度からの調査が必要である。学習者の学習スタイル、学習ストラテジー、レディネス、適性等に関して学習者からできるだけ多くの情報を得るための方法の開発や設問の精緻化が今後の課題である。

## 謝 辞

アンケート調査にあたっては、多くの方々のご協力を得ました。また、論文の審査担当者の方より、数々の有益な助言をいただきました。この場をかりて御礼申し上げます。

## 引用文献

- 稲葉みどり（2013）.「学習者の希望と教師の理想—外国語の授業における一致・不一致を考える—」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』3, 45-52.
- 稲葉みどり（2014）.「外国語学習のビリーフの考察—愛知教育大学の1年生の場合」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』4, 149-156.
- 稲葉みどり（2015）.「小中学校教師の外国語学習のビリーフ—教師間、及び、大学生との比較—」『愛知教育大学研究報告, 人文・社会科学編』64, 19-27.
- 岩井誠二・岩澤和宏（2004）.「ハンガリー人日本語学習者のビリーフス」『国際交流基金日本語教育紀要』14, 123-140.
- 江原有輝子（1998）.「日本人日本語教師とメキシコ人日本語学習者の学習スタイルの違い」『日本語教育』96, 13-24.
- 岡崎智己（2001）.「母語話者教師と非母語話者教師のBELIEFSの比較—日本と中国の日本語教師の場合」『日本語教育』110, 110-119.
- 小原亜紀子・栗原明美（2008）.「インドネシアにおける高校日本語教師研修に関する一考察—西ジャワ州・東ジャワ州のビリーフ調査を通じて—」『国際交流基金日本語教育紀要』4, 27-40.
- 片桐準二（2005）.「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習のBeliefs—フィリピン大学日本語受講生調査から—」『国際交流基金日本語教育紀要』1, 85-110.
- 坂井美佐（2000）.「中国人学習者の日本語学習に対するについて—香港4大学アンケート調査から—」『日本語教育』104, 69-78. 日本語教育学会.



- 高崎三千代 (2006). 「フィリピン首都大学における日本語学習者のビリーフ」『国際交流基金日本語教育紀要』 2, 65-80.
- 高崎三千代 (2014). 「メキシコにおける日本語学習者の特性—ビリーフ調査結果を中心に—」『国際交流基金日本語教育紀要』 10, 23-38.
- 和田衣世 (2007). 「スリランカの大学生の言語学習のビリーフから日本語教育改善を考える」『国際交流基金日本語教育紀要』 3, 13-28.
- Borg, S. (2001). Teachers' Beliefs. *ELT Journal*, 55 (2), 186-188.
- Horwitz, E.K. (1985). Using student beliefs about language learning and teaching in the foreign language methods course. *Foreign Language Annals*, 18, (4), 333-340.
- Horwitz, E. K. (1987). Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden, & J. Rubin, *Learner Strategies in Language Learning* (pp. 119-129). Prentice-Hall International.
- Horwitz, E.K. (1988). The beliefs about language learning of beginning university foreign language students. *The Modern Language Journal*, 72, (3), 283-294.
- Peacock, M. (1998a). The links between beliefs, teacher beliefs, and EFL proficiency. *Perspectives* 10 (1), 125-159.
- Peacock, M. (1998b). Exploring the gap between teachers' and learners' about 'useful' activities for ESL. *International Journal of Allied Linguistics*, 8 (2), 233-250.
- Pajares, F. (1992). Teachers' beliefs and educational research: Clearing up a messy construct. *Review of educational research*, 62 (2), 307-332.

(2015年9月24日受理)